

まえがき

「この銘柄は、年内3倍になるらしい」

こんな“ささやき”を聞くことがある。いったい誰が、誰に向かって、どんな目的で言っているのか。そして、その根拠は何か。冷静に考えれば、すべてが謎なのである。しかし、“ささやき”として伝わってきたということは、それを聞いた人が何十%かを信じ、あるいは一定量の期待を持って受け止め、それを人に伝えたということである。

その銘柄が年内に何倍になるのかは別にして、このような情報伝達の連鎖が起きた、そして投資家心理に何らかの影響を与えたというのは、まぎれもない事実なのである。

我々はおとなであり、コトバを使って考え、コトバで他人と情報のやりとりをする。小さな子どものように、泣いたりぐずったりして意志を伝えようとするのではない。コトバを使いこなし、高度なことに対応する能力も備えている。しかし、コトバの存在によって技術習得の正しい道を見失ったり、大切な部分がぼやけてしまったり、あるいは、全く別の方向に向かってしまうことも、しばしばあるのではないだろうか。

相場とは、株式市場の混沌の中で上手に売り買いして利益を出していく行動である。そして、その内容は数字で示されることが多い。“金融”という簡素で合理的なシステムの特徴として、すべて数字に置き換えていくからである。だから、株価を予測するために、数学・統計学を用いて数字の分析が行われ、その手法は多岐にわたる。ところが、正しいように思える理論も、実は例外が多すぎて言われているほど便利なものではなかったり、とても一方的で矛盾だらけだったりする。

そもそも、我々が「自分だけでもいいから儲けたい」と考えて売ったり買ったりすることで市場の価格が決定されていくのであり、

最大の関心事である株価の予測というのは、太陽や月の動きを観察することとは根本的に違うものなのである。それなのに、売るか買うかという簡単なことを決めるために、必要以上に複雑なことを考えてしまうのだ。そして、その過程で生まれた断片的な情報が「材料」「ニュース」「ささやき」として伝えられ、多くの人の行動に影響を与えているのである。

結局、私たち人間の不合理な思考によって、実に不思議なことが起きているのが株式市場である。だから、そんな不思議なことが起きている背景を解き明かすことよりも、自分自身がどう振る舞うか、を端的に考えることが大切だと思う。実際、投資理論もさることながら、多くの研究熱心な投資家が常識として知っているような市場用語すら知らないにもかかわらず、毎年安定した利益を上げて生活している相場師がいる。その多くは、人に売買を教えるノウハウなど持ち合わせていないが、相場の腕前は凄いの一語である。市場の値動きについて解説をする立場なら、豊富なボキャブラリーを駆使して価格変動の理由をコトバで表現し、読者の共感を得なければならない。売買法を紹介するのなら、整理された文章で万人を納得させなければならない。しかし、プレーヤーとして市場でお金を稼ぐのなら、ストレートに“やり方を知っている”だけでいいのである。

野球の世界で“ミスター”といえは長嶋茂雄さんのことである。長嶋さんのコトバはいろいろところで話題となるが、たしかにおもしろい。たとえば、野球中継で解説をしているとき、アナウンサーからの「こういう球はどうやって打つのでしょうか？」という質問に対して、「グーッと引きつけてズバツと打つんです」と答えたのを聞いた記憶がある。アナウンサーは、もう少し理論的な説明を求めていたのだろうし、テレビの前で聞いているほうもずっと聞いてしまう答えだろう。だが、あらためて考えれば、プレーヤー、つまり実践家として最高と思えることを、100%素直に表現しただけのことではないだろうか。幼稚だとか、訳がわからないと笑うのも一興だが、プレーヤーの感覚的な表現をそのまま受け止め、一瞬でも野球人になったつもりで想像してみるとおもしろい。そして、長嶋さ

んのコトバが持つ迫力に気がつき、印象的なコトバを聞くことができた喜びを感じることができる。

このたとえば、相場という行為にも通じるはずである。金融取引の性質上、すべてがきちんと数字で決められているし、お金に対する真面目さと真剣さがあるから数字で考えようとする。ところが、合理的な思考を常に貫くことは難しい。自分だけはお利口さんになろうとしても、うまくいくものではない。だから、絵に描いたような成功を求めるのではなく、悪循環に陥らないよう自分を抑える努力をするべきなのだ。こういう我慢を一生懸命に実行しながら、決して傲ることなく耐えている少数の人たちが、市場でささやかな利益を、しかし安定して出し続けていけるわけである。

コトバで考えることを否定的に述べてきたが、おとなである以上は物事をコトバで考えざるを得ない。それなら、とことんコトバで考えて、無垢で柔軟な子どもが物事を習得する理想の形に、おとなの方法でも近づくことを目指すべきだ。ある程度のことが理解できたら、知識を積み増していくのではなく、実行力を身につける方向に進むべきなのである。

本書は、林投資研究所のサイトに掲載してきた用語解説をまとめたものだ。ただし実践に直結する“相場技術論”をベースにしているという、ほかにはない大きな特長がある。もちろん、制度的なことについての解説もあるが、相場技術論のシンプルな考え方を伝えるコトバ、「読み物」としてページをめくっていける内容を意識して仕上げた。単語の意味を調べたり、気の向くままに解説を読んだりしながら、相場用語の意味を整理していただきたい。相場社会で我々を混乱させる用語の特殊性を認め、しかし実は単純であることを知り、氾濫する情報に惑わされない自分を確立していただきたい。

おカネだけが飛び交う相場の世界においては、未知の将来に対して確信を持って行動できる人、自分自身の基準を持つ人だけが、勝者となっているのだ。

2004年12月 林 知之

謝辞

この用語集を書籍としてまとめるにあたり、協力してくださった業界の友人たちに感謝を述べたい。福田修司氏、服部洋一氏、斎藤直樹氏、前川和雄氏、吉村憲太郎氏。

売買技術を習得して自立しようと努力する投資家が真に求めるものは何か。こんなことを毎日考えている、みんな、すばらしい人たちである。

林 知之

【実践】

相場 用語事典

目次

まえがき	1
謝辞	4
本書の使い方	6
実践のための「コトバ論」	7
はじめに	8
1. 情報に振り回されないために	12
2. 相場用語の特徴	17
3. 立場によってコトバは違う	26
4. 相場という文化を理解する	39
5. 正しい情報伝達のために	59
おわりに	66
相場用語事典	67
用語索引	403
銘柄ニックネーム一覧表	419
あとがき	426

本書の使い方

解説について

本書の用語解説は、実践に直結する“相場技術論”をベースにしているため、相場用語の意味を調べることはもちろん、売買のスキルアップにも役立つ内容になっている。さまざまな利用法で活用してほしい。

見出し語について

- 用語は、五十音順に並べてある。音引き(一)はあ行のカナに読み替え、ナカグロ(・)は読みの順序には含めていない。
例) ゴールデン・クロス→ごおるでんくろす
- アルファベットや数字についても、読みの五十音順に並べた。
例) R S I→あーるえすあい
例) 1カイ2ヤリ→いちかいにやり
- 同じカナの場合は、清音／濁音／半濁音の順に並べた。

記号について

- ➡ 見出し語についてより理解を深めるための参照語。
- ☒ 見出し語と反対の意味を持つ語。
- ☒ 見出し語と同じ意味を持つ語。
- ☒ 見出し語の略語。

【ここから読みものがあります】

Part2

相場用語事典

【読みもの終了】

あ

アービトラージ

(あーびとらーじ)

売買法のひとつ。サヤ取り。裁定取引。

➡サヤ取り、裁定取引

RSI / 相対力指数

(あーるえすあい / そうたいりょくしすう)

米国のウェルズ・ワイルダー氏によって考案されたオシレーターで、買われ過ぎ、売られ過ぎを示すためのテクニカル指標である。一定期間内の値動きを、「上げた日（前日比プラス）」と「下げた日（前日比マイナス）」に分けて計算する。上げた日の値上がり幅平均を、上げた日の値上がり幅平均と下げた日の値下がり幅平均の合計で割り、100をかけて求める。数式は以下の通り。

$$RSI = A \div (A + B) \times 100$$

※ A 上げた日の値上がり幅平均

※ B 下げた日の値下がり幅平均

ワイルダー氏によれば、計算の対象期間は14日が最適で、70%以上が買われ過ぎ、30%以下が売られ過ぎと判断すべき、とのことである。

この指標は一見非常に便利で、かつ合理的なようであり、たしかに相場が適度な往來を繰り返すときには有効だが、勢いよく一方方向に動くことを前提としていないため、プロ・上級者には使用されていない。また、RSIの天底と実際の値動きの天底がずれてしまうことも、実用性の面から考えると大きな欠点である。

相対売買

(あいたいばいばい)

証券会社が顧客の注文を取引所に出さず、自らが相手方となって

成立させる売買。

青天井

(あおてんじょう)

青空を天井に見立てて、株価が限りなく上がること。

実際には「限りなく上がるといえそうな状況」ということだが、「ここで買ってもしリスクがない」「買わないヤツはバカだ」という極端な心理である。もし、こんな言葉が頭に浮かんだら、市場の人気にのまれていると認識するべきで、そんな冷静さを欠いた状態で「では、すでに天井圏であり、カラ売りを検討するべきだ」などと考えても、さらに高値の荒い値動きに振り回されて損をするだけである。

青伝票

(あおでんびょう)

①売り注文を処理するための青い伝票。青伝（あおでん）。売り伝票。

②転じて、「売り注文」のこと。

注文を取引所に出す際は端末に内容を入力するのだが、売買注文を記した複写式の伝票（法定伝票）を書くことが義務づけられている。大きさなどは証券会社によって異なるが、売り伝票は青、買い伝票は赤と決まっている。

「青伝を切る（売り注文を出す）」などと使われる。

☒赤伝票

煽る

(あおる)

①多数の一般投資家が追随して買ってくることを目的に、ニュースを流すこと。

②買い煽ること。

赤伝票**(あかでんぴょう)**

- ①買い注文を処理するための赤い伝票。赤伝（あかでん）。買い伝票。
- ②転じて、「買い注文」のこと。
「赤伝を切る（買い注文を出す）」などと使われる。

図青伝票

商い**(あきない)**

「取引」のこと。古くさく泥臭い言葉ではあるが、株式市場では一般的に使われる。

- 商いがある＝取引が活発＝出来高が多い
- 商いが無い＝商いが少ない＝商いが薄い

➡出来高

悪材料**(あくざいりょう)**

株価の下落につながるニュース、情報。

➡材料 図好材料

アクティブ運用**(あくていぶうんよう)**

- ①人間の主観によって行う通常の売買。
 - ②（日経平均、TOPIXなどの指数に連動するように株式を保有するインデックスファンドに対して）市場平均を上回ることを目的として独自の判断で行う売買。
- 最近、②の意味で使われることが多いのだが、本来は①の意味である（詳しい説明は「パッシブ運用」の項を参照）。
「主観による売買」といっても、その感覚は当然、経験に基づい

て築かれたもので、数値化あるいはルール化することが可能な場合も多いはずである。したがって、アクティブ運用と反対のパッシブ運用は本質的に同じ、ということができる。

図パッシブ運用 ➡運用

灰汁抜け**(あくぬけ)**

相場下落につながる悪材料が消滅したり、あるいは、悪材料はあるが織り込み済みとなって、これ以上の下げ余地がなくなった状態のこと。

上げ下げを繰り返す相場の自律性を考えた場合、日柄整理によって次の上昇に向かう下地ができる。どのような場面でもこれが原則であるが、「灰汁抜け」という場合、日柄よりも「値の整理」というニュアンスである。

悪目**(あくめ)**

上げてきた相場が下げること。下がっている相場。一時的な下げ。あまり聞いたことがないので、古い言葉と思われる。「押し」が自然に使われている。

上げ足**(あげあし)**

- ①上げ相場。相場が堅調な様子。
- ②上げのスピードのこと。

「足」という言葉から、もともと罫線用語だと考えられるが、一般的な相場用語として使われている。ちなみに「揚げ足を取る」という慣用語とは無関係である。

【例】上げ足を速める。上げ足が続いている。

図下げ足

上げ下げ**(あげさげ)**

- ①株価が上げたり下げたりするさま。価格変動。
- ②価格変動の状況、すなわち値幅、変動率、変動のスピードなど。消費行動では、その時点での価格とふところ具合を問題とするが、相場は手持ちの現金を増やすことを目的として一時的にポジション(玉)を取る行動であり、「株を買う」とは「値上がりを期待して株を一時的に所有する」ことである。
- 大切なのは、「株価がこの先どう動くか」であるが、予測をの確率を大幅に上げる試みが現実的ではないため、「自分がどう行動するか」が肝心なこととなる。

上げ相場**(あげそうば)**

トレンドが上向きで、日柄とともに上がっていく相場。細かい上げ下げは当然あるのだが、傾向(トレンド)として上がっていく相場を上げ相場という。

☒下げ相場

上げ止まる**(あげどまる)**

ある程度上がり、もう上がらなくなってきた様子。買い方の増加傾向が鈍くなり、天井保合の様相となって、下向きのトレンドに移行しそうな状況。

☒下げ止まる

足**(あし)**

- ①チャート。チャートの姿。
- ②取引口座に生じた赤字。つまり、信用取引など口座の資金以上のリスクを負う取引で突発的な動きや損切りの遅れで資金以

上の損をした場合に生じた不足額。

「罫線屋、足を引き引き足を出し」とは、罫線(チャート)そのものを否定しているのではなく、「罫線による予測法に盲信的になっている」姿勢を皮肉ったものである。

足取り**(あしどり)**

過去の値動きの経緯。

もともとは罫線用語だと思われるが、理論的に説明しにくい部分を表現するときなどに使われる感覚的な言葉。

トレンドと同義で使われることもあるが、足取りのほうが感覚的なニュアンスをかなり含んでいる。

預かり資産**(あずかりしさん)**

証券会社が顧客から預かっている資産の額。現金(預かり金)、株券、債券などの総額。顧客が手元や銀行に置いている売買資金などは入らない。証券会社全体、支店や部署単位、あるいは扱者単位で計算され、時には顧客ごとに計算される。

証券会社としては、顧客の損益に関係なく、頻繁な売買をしてもらうほうが手数料収入が増える。ただ、顧客が死ぬと手数料が落ちなくなるし、良心がとがめる。口座数とともに預かり資産を増やし、無理な勧誘をせずに安定した手数料収入を得ようとするのが、健全な証券会社またはセールスマンである。ちなみに「死ぬ」というのは、ほんとうに死ぬことではなく、業界の隠語。

➡死ぬ

当たっている**(あたっている)**

当たる状態が続いていること。当たり屋。

➡当たる、当たり屋

頭打ち**(あたまうち)**

相場が天井を打つこと。また、天井を打って下げ相場になりそうな気配。昔は天井のことを「頭(あたま)」といったらしい。上げ相場は、買い方が増加していくことで形成される。買い方の増加が鈍れば、人気で持ち上げられていた分が自然に消えていく。すなわち、トレンドは下向きとなる。

頭とシッポはくれてやれ**(あたまとしっぽはくれてやれ)**

腹八分目がベストという意味の相場格言。天井と底を当てれば、変動した幅が丸まる利益となるが、そのような非現実的なことを目指せば、トレンドに逆行して損をする羽目になる。一般的には使われないが、『株式商品 成功相場大学』の著者である鈴木隆氏は「刺身相場」と、捨てる部分ではなく食べる部分を中心に、同じことを表現した。

当たり屋**(あたりや)**

相場の予想が当たっている人。相場の予想がよく当たる人。相場の予想が当たったからといって、必ず儲かるとは限らない。結局は、当たり外れの中でどれだけ利益を出して損をどれだけ抑えるか、結果を安定させて継続させていくことができるかどうか問題である。また、誰がやっても当たり外れの確率は最終的に同じである。だから、当たり屋と言われ出したら、近いうちに曲がり出すはずである。しかし、曲がる人は、自らの間違いで曲がり続けるため、「当たり屋につくより、曲がり屋に向かえ」「当たり屋と言われたころより曲がり出し」などといわれる。

☞曲がり屋

当たる**(あたる)**

相場の予想が的中すること。
☞当たり屋 ☞曲がる

厚い**(あつい)**

参加者が多く、人気が高い状態。
○板が厚い＝注文が多く入っている。
○取組が厚い＝信用取引残高で、売り残高、買い残高ともに多い状況。
☞薄い

扱者**(あつかいしゃ)**

セールスマン、営業マンを指す、内部で使われる言葉。証券外務員試験に合格し、所属する証券会社を通じて登録された者が扱者コードをもらい、営業活動を行う資格を得る。

当てもの売買**(あてものばいばい)**

相場の予測を当てることだけに目が向き、肝心の売買に関する具体的方法論が欠落している売買。当て屋が行う、儲からない売買のやり方。林輝太郎の著作などに出てくるが、一般的な相場用語というよりも造語だと思われる。しかし、株価の変動は非常に大きく、一攫千金の夢を持つのが自然な心理であるから、頭に入れておきたいコトバである。

当て屋**(あてや)**

相場の予想を当てることに執着する人を否定的に呼ぶコトバ。
相場の結果は予想の当たり外れではなく、当然起こる当たり外れ
に対してどう対処するか、つまり相場技法によって決まるのであ
る。

当てる**(あてる)**

うまく予測を立て、結果的にうまく当たることを目指すこと。
誰でも「予測が当たる」ことを望んでいるのだが、当たり・外れ
は最高で50%。それに欲がからむから、常に50%未満しか当たら
ないのが現実である。だから、「当てる」ことは不可能なのであり、
結果的に「当たる」ことがあるだけである。

アノマリー**(あのみりー)**

値動きの習性において理論的に説明できない変則性であるが、一
定の規則性として認められる事実。アメリカでは理論的な研究が
非常に進んでいる。

「月曜日は投資収益率が低い」(月曜ボケ)、「年末は小型株が乱高
下する」(もちつき相場)、「5月の連休明けが高値となることが多
い」など、それが現実でも単なる説であってもアノマリーと呼ぶ。

浴びせる**(あびせる)**

➡売り浴びせる

甘い**(あまい)**

相場が若干安い様子。

直近の株価が、小幅に下げている様子。
上げ相場を基本として表現されている。

☒しっかり

綾／アヤ**(あや)**

トレンドの中で起きる一時的なぶれ。小さな変調。
トレンドが続いていても一直線に動くことはなく、必ず細かい上
げ下げの繰り返してあり、規則的に動いてくれるわけではない。
しかし、わかりやすい単調な動きを基準として、一時的なぶれを
「アヤ」と表現する。通常、「綾押し」「綾戻し」などと使う。
綾を狙って売買することを「アヤを取る」「アヤを取りに行く」と
いうが、トレンドに逆らわない狙いのほうが、やりやすいことにな
る。

➡押し目、戻り

歩み値**(あゆみね)**

立会中に約定がついた個々の商いのデータ。

➡ティック

荒い**(あらい)**

➡荒れる

荒れる**(あれる)**

- ①上げ下げの振幅(値幅)が大きいこと。
- ②方向性がはっきりせず、目まぐるしい動きをみせること。
値動きを感覚的に表現するコトバで、単に「大きな動き」という
よりも、下手に売買すると振り回されてしまいそうな、つかみど

ころのない値動きをいう。

大きな上げのあと、カラ売りや投げによる急激な下げ、踏み上げによる急騰などで荒れることが多い。また、企業の存続問題が発生するようなことがあれば、安値圏でも荒れた動きになる。

➡乱高下

アンコ

(あんこ)

利食いの両建てをアンコという。

すでに利の乗っている(評価益の出ている)玉を手仕舞いせずに、同数量のツナギを入れればアンコとなる。

「アンコの玉」「アンコの両建て」ともいい、「アンコにする」「アンコをつける」などと使われるが、あまり上品な言い方は思えない。関西では「パッチ(ももひき)」といい、「パッチをはく」などと使う。

安定株

(あんていかぶ)

経営者、取引先など特定の者が所有し、市場に出回ることがほとんどない株。

詳しい解説は「浮動株」の項を参照。

図浮動株

安定操作

(あんていそうさ)

株式の公募や売り出しを円滑に進めるため、株価を一定の範囲にとどめる目的で、市場において売買を行うこと。

人為的に相場を操作することは相場操縦として厳しく禁じられているが、公募や売り出しのために届け出て、一般にも公開される報告書提出などを条件に限定的に認められている。

い

ETF

(いーていーえふ)

株価指数型上場投資信託。(Exchange Traded Funds)

日本では、一般的な投資信託が投資家の資金を固定した上で業者が手数料を取る目的で存在していると指摘されており、より透明性の高い上場型投資信託の普及は、市場発展と信頼獲得につながると考えられる。

ETFは、高度成長期につくられた構造、すなわち銀行を中心とした歪んだ株の持ち合い構造を解消する受け皿として次々に組成されているが、このような上場型の投資信託が普及することで、かねてより一部の識者が主張してきた、最も透明性の高い「会社型投資信託」普及への足がかりとなることも期待されている。

イールド・スプレッド

(いーるど・すぷれっど)

①債券間の利回り格差。

②長期金利から株式益利回りを引いたもの。

一般的には①の意味だが、株式市場では主に②の意味で使われる。つまり、長期金利(一般的な金利水準)と株式益利回りを比較することで、1)債券・株式のどちらに投資妙味があるか、2)株式が金利水準から見て割高か割安か、を判断しようとするもの。

「差」ではなく、株式益利回りを長期金利で割ったものをイールド・レシオという。

しかし、株価と金利水準を比較することがそもそも無理なことであり、実践家は使わない。株価変動そのものの上げ下げを見ていくのが本筋である。

イールド・レシオ

(いーど・れしお)

株式益利回りを長期金利で割ったもの。

→イールド・スプレッド

勢い

(いきおい)

上げ下げのスピード。主に上げて使われる。

高値圏ほど勢いが強い。

行き過ぎ

(いきすぎ)

人気、あるいは特殊な売買によって価格が上（または下）に過度に動くこと。

変動するのが株価であるが、「スピードが速すぎる」「一時的な現象で目先は押し目（戻り）がありそうだ」という認識から行き過ぎと表現することがある。しかし、どのような株価であっても、単に市場の事実と考えるのが基本。

維持率

(いじりつ)

→委託保証金維持率

居過ごし

(いすごし)

- ①ジッとしたままで手仕舞いなどの好機を逃し、結果的として有利な玉を不利にしてしまうこと。
 - ②不利な玉に対して損切りなど適切な対処をすることなく放置し、ますます不利にしてしまうこと。
- 玉をいじりすぎるのも問題だが、株価の先行きを知ることができない以上、臨機応変に対処していくことで結果をコントロールし

ていくしか方法はない。バタバタとした狙いどころのはっきりしない売買はいけませんが、動くべきときにはスパッと動くことが必要である。

居過ごす

(いすごす)

→居過ごし

居座り

(いすわり)

- ①株価が動かず、同じ値頃にいること。
- ②玉を動かさずに寝かせ、ジッとしていること。
- ③玉を増やし（増し玉）て、さらに偏らせること。たとえば、買っている場合に買い玉を増やす、売っている場合に売り玉を増やすことで、上記②の状況をさらに積極的に行っていくこと。
- ④市場全体の需給を観察する上で、大手筋が上記②、③の状態にあること。

板

(いた)

- ①取引所で売り買いの注文を控えたもの。
 - ②指し値注文の状況。
- 現在はコンピュータによるシステム売買だが、基本的な値つけ方法は変わっていない。
- 寄付と引けは売り買いの注文を集めて価格優先で付け合わせるが、ザラ場では注文が来た順（時間優先）に、売り指し値は安いもの、買い指し値は高いものを優先して（価格優先）、個別に売買を成立させていく。
- 参加者が多く指し値注文が多いことを「板が厚い」、少ない状況を「板が薄い」「板がない」と言う。

委託

(いたく)

➡委託売買

委託売買

(いたくばいばい)

投資家からの委託を受けて売買注文を市場に出す、証券会社の仕事。略して「委託」とも。すべての投資家は、株を売買するためには証券会社を通じて取引所に注文を出すことになる。

☑自己売買

委託保証金維持率

(いたくほしょうきんいじりつ)

証券会社の取引口座において、差し入れてある保証金が、信用取引の建玉（玉）に対して何パーセントあるかを示す数字。俗に「維持率」といわれる。

信用取引の口座の状況は毎日値洗いされ、既存建玉の評価損が増えれば、その分は丸まる保証金が減ったものとして計算される。また、保証金が代用有価証券の場合、その価格変動も影響するので、建玉に変化がなくても委託保証金維持率は変化する。

委託保証金維持率は30%（規制のない状態）で、それを上回っていけば新規に玉を増やす余力があり、悪化して20%を割れば、即座に保証金を追加するか建玉を減らして維持率を改善させる必要がある。委託保証金維持率が20%を割れることを、俗に「追い証」という。

追い証になる以前に、維持率割れを心配する段階で、そうとうな評価損を抱えているか、そもそも玉が多すぎるのである。

板寄せ

(いたよせ)

ザラ場では、時間優先の原則によって、そのとき存在する注文を

個別に処理し、価格の条件さえ合えば次々と成立させていく。

しかし、寄付と引けでは、注文を整理して価格優先で処理し、1本の価格を決める方式がとられる。これを板寄せ方式と呼ぶ。寄付、引け以外でも、大量の注文がひとつの銘柄に殺到したとき、何らかの理由で取引が一時中断されたときなどに、板寄せが行われる。

バブルの1980年代には、大量の資金が株式市場に流れ込み、活況による高い中断・板寄せがたびたび起きた。このため、「大量の注文を整理するための一時中断＝板寄せ」という使い方がなされたが、正確な意味は前述の通り。

当時はまだ、立会場で主立った銘柄が取引されており、大量の資金を短時間でさばくことのできる大型銘柄にまとまった数量の注文が無い込むケースが多く、中断・板寄せの際にはホイッスル（笛）が吹かれた。このため、「中断・板寄せ」を「笛吹き」あるいは「笛吹き・中断」などとも表現した。

1カイ2ヤリ／一カイニヤリ

(いちかいにやり)

相場を行うこと。相場そのものを指す語。

「1カイ2ヤリ」の本来の意味は「1円カイ2円ヤリ」という気配を表す。つまり、たとえば「201円に買い指し値があり、202円に売り指し値がある」という板の状態であるが、慣用句として使うと、上記のような意味となる。「1カイ2ヤリで長年やってきた」などと使う。

一巡

(いちじゅん)

➡買い一巡、売り一巡

一代足**(いちだいあし)**

チャートの一種。主に商品先物で用いられる。

先物が新甫として生まれたときから、期限が来る(納会)まで、月が替わっても同じ限月を連続して描いたもの。発会から納会までの傾向がわかる。日足のローソク足が一般的。

商品先物で用いられるが、株式市場における先物は期近が取引の中心であるため期先はほとんど取引されず、一代足はまず使われない。

➡一代棒

一代棒**(いちだいぼう)**

チャートの一種。一代足を1本として描いたもの。その一代足に、先物時代(発会後の1ヵ月間)の高値・安値を加えたものもある。限月が6つある「6限月制」の場合、常に未完成の足が6本並んでいることになる。

商品先物で用いられるが、株式市場における先物は、期近が取引の中心であるため期先はほとんど取引されず、一代足が使われることはほとんどなく、当然、一代棒も使われることはない。

➡一代足

一段高**(いちだんだか)**

上げ相場で順調に上昇してきた株価が、さらに勢いよく上げることという。

☒一段安

一段安**(いちだんやす)**

しばらく下げ相場が続いている状態で、さらに下げること。

☒一段高

一目均衡表**(いちもくきんこうひょう)**

一目山人によって考案されたチャート。

予測法として価格データを加工して重ね合わせていくものだが、「複雑なだけで実用性が薄い」と指摘する実践家もいる。いずれにしても建玉法に言及していないので売買法ではなく、利用方法は使用する者に大きく委ねられる。

一文新値**(いちもんしんね)**

上昇して新値をつけたが、過去の高値を一文(いちもん)しか上回らないこと。

一文とは呼び値の単位、いわゆる価格の刻みであり、2,000円以下の株価なら1円、2,000円超3,000円以下が5円というもの。

高値を更新したものの、潜在的な売りをすべてこなした、つまり値が軽くなったとは言い切れず、二番天井となる可能性があることから、「鬼よりこわい一文新値」というコトバもある。

厳密に計算してピタリ同値、一文新値、さらにもう一文上値のそれぞれが大きな違いを持つと解釈してしまったら極端だが、短絡的に「上がってきたからもっと上がる」と希望的観測で判断するな、という意味の戒めとして有効であろう。

一過性**(いっかせい)**

①材料の効果が一時的なこと。

②価格の変動が一時的な現象で、すぐに落ち着くこと。

とくに相場用語ではないが、よく使われる。「症状・現象が短い間に起こり、また消える性質のもの」(広辞苑)。

いってこい

(いってこい)

- ①上がっていた相場が一転して下げ、もとの水準に戻ってしまうこと。
- ②下がっていた相場が一転して上げ、もとの水準に戻ってしまうこと。

「変化が出てあらたなトレンドを形成しそうになったが、大方の予想に反して元に戻ってしまった」ということ。通常、①の意味で使われることがほとんどだが、②の意味もある。

市況解説をするのならこのコトバを発して終了だが、実践している立場では次の一手を考えなければならない。時間の問題で再び同じ方向に動くのか、あるいは全く違う動きが出てくるのかを慎重に考えながら、戦略に沿った冷静な行動を取っていかなければならない。

一服

(いっぶく)

相場の動きが一時的に止まること。

「それまでのトレンドが今後も続く」という予測が前提である。

上げ相場で「上げ一服」、下げ相場では「下げ一服」という。

(上げ相場における)押し目、(下げ相場の中の)戻りとほぼ同じだが、少しニュアンスが違う。一服は「動きが止まった」という意味で、「押し目」「戻り」は、「逆行した」という意味を強く含む。

移動平均線

(いどうへいきんせん)

アメリカのグランビル氏によって開発されたチャート。

通常のチャートが実際の価格を連続した線として表現されるのに対し、移動平均線は任意の期間の平均値をつなげていく。たとえば「100日移動平均」なら、過去100日分の価格の平均を点で表し、次の日の平均は最も古い1日を削除して新しい1日を加えた数の

平均となる。

移動平均線は、任意の期間の平均をとることで実際の値動きに対して上げ下げがなめらかになり、同じ銘柄の移動平均線で比べても、期間が長くなるほどなめらかになっていく。この特性を使って傾向(トレンド)の変化をとらえるのが目的であるが、間接法であることから、有効性については疑問である。

実際の価格—任意の期間の移動平均線、短期の移動平均線—中期の移動平均線、中期の移動平均線—長期の移動平均線、という組み合わせをすることで、それぞれの線にずれが生じる。この「ずれ」から株価の変動を読みとるのが、素直に読みとれる状況ほど移動平均線など必要のない状況になる。また、前述したように間接法であることから、実践家は否定的に考え、使用しない。ちなみに、移動平均線が交差するポイントを次のように呼ぶ。

- ゴールデン・クロス—中期線が長期線を上抜く
- ミニ・ゴールデン・クロス—短期線が中期線を上抜く
- デッド・クロス—中期線が長期線を下抜く
- ミニ・デッド・クロス—短期線が中期線を下抜く

イモ筋

(いもすじ)

相場に惑わされて簡単にヘタな手を打つ者。

相場の動きは誰にでもわかるような決まったパターンをみせず、その中において期待と不安を抱えながら玉を動かしていかなければならない。良い結果を安定的に出すには、自分の予測法や売買法をしっかりとさせて対応していく以外にない。しかし、なんとなく「儲けたい」「儲けの機会を逃したくない」と安易に取り組めば、ちょっとしたアヤで逆の売買をしたり、流行に振り回されて損を積み重ねてしまう。きちんと考えている人でも、イモ筋になるかどうかは紙一重であり、範囲を限定し、狙いを絞り、余裕を持って張ることが大切となる。

嫌気

(いやけ)

悪材料や思惑通りに上がらない状況を嫌うこと。

「嫌気する」「嫌気売り」「嫌気投げ」などを使う。「上げ相場＝良い」というのが基本なので、たとえカラ売りして持ち上げられたとしても、そういう状況で嫌気とはいわない。

【例】 急激な円高を嫌気して輸出関連株が売られた。

事前予想ほどファンドの買いが入らず、嫌気売りを誘った。

嫌気売り

(いやけうり)

嫌気が原因で株を売ること。

→嫌気

嫌気投げ

(いやけなげ)

嫌気が原因で株を投げること。

→嫌気

煎れ／イレ

(いれ)

関西の言葉で「踏む」ことを指す。

→踏む

インカム・ゲイン

(いんかむ・げいん)

Income Gain。

(キャピタル・ゲインに対して) 有価証券を保有していることによって生じる利子・配当の収入。

因果玉

(いんがぎよく)

しこり玉のこと。

→しこり玉。

陰線

(いんせん)

① ローソク足において、始値より終値が安く、黒く塗りつぶされている線。

② チャートを使った特定の予測法において、下げ相場を考えるべき足取り。売り線。

→ローソク足 図陽線

インターネット取引

(いんたーねっととりひき)

投資家がインターネットを経由して証券会社に注文を出したり、一連の取引を行うこと。ネット取引、ネット売買。

インターネットの普及とともに、通信時の暗号技術向上によって安全性が高まり、また、1999年10月からの株式委託手数料引き下げで格安の手数料体系を売りものにする証券会社が多く出現し、安い手数料を実現するために営業マンを介さないインターネット取引が盛んになった。パソコンを端末として、各種データを見ながら時間を問わずに注文を出せるのは非常に便利だが、利用者の成績が悪いといわれ、1) 安い手数料のため安易に売買してしまう、2) 人が介在しないために「価値観喪失」の状態になりやすい、などと指摘されている。しかし、デイ・トレードなど、個人投資家に多くの取引手法が提供されることに寄与しており、市場の流動性が高まったことも事実である。

数ヵ月以上の日柄で売買する標準的な売買法なら、手数料の額よりも売買損益のほうがはるかにウエイトが高く、精神的に落ち着いて売買できる環境が望ましい。したがって、インターネット取

引を避けるのが無難な選択といえる。だが、そういった環境に対する向き・不向きの問題もあり、多様化する証券会社の営業形態から好みのものを選べばいいのだが、上記のような弊害が心理的にあることを考えながら利用しなければならない。

陰転

(いんてん)

トレンドが下向きに転じること。罫線用語。詳しい解説は「陽転」の項を参照。

☞陽転

陰の極

(いんのきょく)

最も状況が悪く、これ以上は下がらない状態。つまり、上げ相場の直前。

下げトレンドが続いて安くなり悪材料が蔓延しているが、売りが一巡した状態で下げ止まっており、多少の日柄が経てばトレンドが上向きになるであろう、と観測できる状態。

単に「悪材料が出尽くして（織り込み済み）買い安心感がある」というよりも、「状況が最悪で、さらなる下げがこわい。しかし、底のようである」という意味合いで使われる。

陰陽

(いんよう)

- ①上げ下げ。
- ②上げトレンドと下げトレンド。
- ③特定のチャートや予測法における買い線・売り線。

陰陽足

(いんようあし)

⇒ローソク足。

う

VWAP／ヴィワップ

(うゝいわっぷ／ぶいわっぷ)

出来高加重平均価格。Volume Weighted Average Price。

任意の期間（通常は1日）において、ティックごとの「出来高×出来値」を合計し、出来高の合計で割ったもの。

取引所における実勢価格を最も的確に示すものとして、機関投資家が取引の基準とすることがある。とくに証券会社と相対で取引を行う場合（決め商い）の基準値として使用される。

受渡

(うけわたし)

注文が成立（約定）したあとの、金銭等の授受。

- ①現物の受渡—約定の日から（その日から起算して）4日目に株券（現物）と現金（丸代金）をやりとりする。
- ②信用取引の受渡—新規の場合約定日の翌々日までに必要な担保を入れ、返済の場合（その日から起算して）4日目に担保が自由になる。また、（決済時の）損益金の受渡も4日目である。
- ③先物・オプションは、業者間の決済リスク軽減のため、約定の翌日に受渡が行われている。株式もいずれ翌日決済が予定されている。

受渡日

(うけわたしばい)

約定のあと、実際に証券や現金を証券会社と受渡する日。

現金も証券も預けたまま、証券会社の口座の中で出し入れしている場合でも受渡日は決まっている。

ほかの解説は、「受渡」の項を参照。

薄い

(うすい)

参加者が少なく、出来高や注文が少ない状態。

- 人気が薄い＝人気がない
- 板が薄い＝市場に出ている注文が少ない
- 商いが薄い（薄商い）＝出来高が少なく閑散、小動き

☒厚い

内出来

(うちでき)

注文した数量のうち、一部分のみ約定されること。

たとえば10,000株注文して3,000株しか出来なかった場合、「3,000内出来、7,000残り」という。また、残った株数が少なくても内出来という。

【例】9,000株内出来、1,000株残り

うねり取り

(うねりとり)

3ヵ月、6ヵ月という株価の自然な上げ下げを対象とした売買。

銘柄を固定して行う、ごく標準的な売買といえる。

売買は単に「上がるか下がるか」ではなく日柄（時間の経過）が問題なのであり、「どういう値動きを狙い、どれくらいの期間で区切りをつけるか」を事前に決めておかないと、単に玉を持って株価の動きに一喜一憂するだけになってしまう。

埋め

(うめ)

返済と同じ意味。「落ち」に同じ。

➡落ち

売り上がり

(うりあがり)

➡難平／ナンピン

売り浴びせる

(うりあびせる)

株価が崩れることを狙い、大量の売り注文を出すこと。

☒買い煽る

売り一巡

(うりいちじゅん)

相場が下げたが、投げが出尽くして再び上昇する地合いが固まったこと。

株の上げは買い方がつくる。つまり、買う投資家の増加によって上がる。しかし、下げは売り方がつくるのではなく、買い方の投げによって下がるのである。

☒買い一巡

売り方

(うりかた)

- ①カラ売りのポジション（玉）を持っている人。それらの人を集めて的に指す場合もある。
- ②その日市場で売った人。
- ③市場に売り注文を出している人。
- ④板にある売り注文。

☒買い方

売り方有利の原則

(うりかたゆうりのげんそく)

市場で利益を求めるとき、「買って値上がりを待つ」ことだけではなく、「売って値下がりを待つ」ことも自由に行うことができる。

これは先物に限らず、現物でも信用取引を利用すれば誰にでも可能である。にもかかわらず、投資家は買うことに興味が偏る傾向（買い偏重）が極めて強い。

しかし、下がった相場が必ず上がるとは限らず、また上がったとしてもそれに至るまでの底練りが非常に長期にわたることも少なくない。逆に上がった相場は、そう遠くないうちに必ず下がるのが市場の公理である。なぜなら、上がるということは人気によって実態より割高になることであり、買い方の新規参入のペースが落ちれば、必然的に下げ相場に転じるからである。

歴史の中で、買い集めを続けて財をなした投資家はなく、買ったものを手仕舞い（売り）するあたりまえのことに加えて「一定期間、好機を待つために休む」ことを意識した行動をとった投資家、あるいはサヤすべり取り、カラ売りのように「売りから入る」売買法、あるいは「売りという考え方を正しく意識した」売買法を継続した投資家のみが成功をおさめているといわれている。

売りが売りを呼ぶ （うりがうりをよぶ）

売り方が増加し、買い方の投げが多く出ることによって値が下がり、その値下がりがさらなる売り方の増加を呼び込むという、投機的な状態。

何らかの基準によって、株価水準を計ろうとするのは当然である。だが、天体の動きなどの自然現象と違い、自らの行動（売買）が価格に影響を与えていくのだから、的確な計測方法など存在し得ない。また、価格の水準や変動を理論的に解説することではなく、実際に利益を上げることが目的であるから、「市場は常に投機的」ともいえる。

しかし、下げトレンドの末期、あるいは特定の銘柄において極端な投機人気になることはある。

☒買いが買いを呼ぶ

売り決め （うりきめ）

➡決め買い

売り気配 （うりけはい）

➡気配

売り越し （うりこし）

- ①特定の証券会社や投資主体が一定期間内に売った数量と買った数量を比べたとき、売りが買いを上回ること（数量は株数で見ると金額で見ると異なる場合がある）。
- ②ある時点において、売りが買いを上回っている玉の状態。
- ③買い玉を持っている状態から上記②の状態へ変化すること。売り越し。

【例1】[現物10,000株] → [現物10,000株、カラ売り10,000株]
→ [現物10,000株、カラ売り20,000株]

【例2】[現物10,000株] → [手持ちゼロ] → [カラ売り10,000株]

- ②および③の場合、信用取引に限って使うという解釈があるが、実践的に考えて間違いである。現物保有も株価変動によって損益が生じる点で信用取引と変わりはないのである。

「売り長」とは意味が異なる。

☒買い越し

売り越す （うりこす）

➡売り越し

売り下がり

(うりさがり)

トレンドが下向いたあと、売りを乗せていく玉の入れ方。追撃売りのこと。

平均値は不利になるが、トレンドを確認しながら増やしていく点に優位性がある。

→利乗せ ㊦ナンピン (売り上がり)

売り材料

(うりざいりょう)

→弱材料

売り残

(うりざん)

→信用取引残高

売り線

(うりせん)

①下がると思われるチャートの形やパターン。

②売るべきチャートの形やパターン。

③陰転したと判断できるチャートの形やパターン。

一般的な野線論における判断と、特定の野線論におけるものがある。

㊦買い線

売りたい強気

(うりたいつよぎ)

相場観を表す言葉。

「上がる」という強気の予想だが、上げ相場ではなく一時的な「戻り」であり、「戻ったら売る」という戦略と「希望する価格まで一度戻ってくる」という予想が同時にあるときの投資家心理。

「戻り待ちに戻りなし」という言葉もあり、不自然な心理状態であることが多い。

「希望的観測であり、そうはならない (戻りをみせずにながら)」と皮肉るときにも使われる。

㊦買いたい弱気

売り手市場・買い手市場

(うりてしじょう・かいてしじょう)

需給の片寄りを表す言葉。

売り手市場＝買いが多く、苦勞なく高値で売ることのできる状態。

買い手市場＝売りが多く、苦勞なく安値で買うことのできる状態。

株式市場は広く一般に開かれた取引の場で、需給の片寄りがかなり少なく効率的である。需給 (人気) の増減によって価格が変動する、という理解が正しい。

売り伝

(うりでん)

売り注文を出すための伝票。

→青伝票

売り直し

(うりなおし)

売っていた (カラ売りしていた) ものを一度手仕舞いし、あらためて売ること。

戦略通りに売り直すのは問題ないが、手仕舞いの判断を「早すぎた」と悔やんで無理して売り直すのは、「二度の思惑すべからず」といわれるように、避けるべきである。

売り長

(うりなが)

信用取引において、売り残が買い残を上回っている状態。上長

(うわなが)とも。

通常は買い残のほうが多く、また、売り残は潜在的な買いである(いずれ買い戻す)ことから、売り長のときには踏み上げを期待する声が必ず聞かれる。しかし、極端に売り長であっても実際にそこから大相場につながることは少ない。売り長の状態になるまでに一定の値上がりをしているということと、取組だけで将来の価格動向が決定されるわけではないからである。

「売り越し」とは意味が異なる。

☒買い長 ☒上長 ➡信用取引残高

売り端／売りハナ

(うりなは)

商品相場の用語。

商品取引所で行われている^{せつあきな}節商い(板寄せ方式、セリ)では、売りと買いが同数になった時点で価格が決まる。セリ(競り)の途中、売りと買いのどちらかに偏れば価格決定に必要な端数が生じている状態で、その端数を端(ハナ)と呼ぶ。買いのほうが多い場合を売り端といい、あと10枚売りが必要とき、「10枚の売り端」という。

株式市場のザラ場方式に強引に当てはめれば、売り端=買い気配となろう。

☒買い端

売り逃げ

(うりにげ)

買い玉を、暴落の前にうまく売り切ること。売り抜け。

「かろうじて」「素早く」「上手に」「短い上げ相場にもかかわらず」

「大量に買っていただけにもかかわらず」などのニュアンスを含んで使われる。

売り抜け

(うりぬけ)

➡売り逃げ。

売りは早かれ、買いは遅かれ

(うりははやかれ、かいはおそかれ)

売りは素早く行い、買いはゆっくり行うべきだという意味の格言。上げ相場は買い方がつくるが、下げ相場は売り方がつくるわけではない。買い方の変化、つまり、買い方が増加するペースの低下、買い方の投げによって株価は下がるのである。

言い換えると、買い方によって持ち上げられているときだけ高く、力が弱まると下げてしまうのが株価である。つまり物を持ち上げた手を離すと、引力で床に落ちてしまうのと同じ状況である。

株価変動は、このような性質を持つため「上げ相場はいつ突然終わるかわからない」が「下げ相場は長く続く」というのが、実践的な理解となる。

下げ相場は最初だけが急激で、あとはダラダラと続き、地味な底練りの先に、あらためて再度の上昇トレンドを迎えるのである。

売り場

(うりば)

価格動向から「売るべき場所」(時期)を指す言葉。

しかし、将来のことは誰にもわからないのだから、その判断は売買法とそれに沿った予測法によって決定されるもので、絶対的な判断基準は存在し得ない。

売りもの

(うりもの)

売り注文のこと。(お店の)商品、製品という意味ではない。

潜在的な売りを含めずに、単純に「市場に出ている売り注文」を指す。☒買いもの

売るべし、買うべし、休むべし

(うるべし、かうべし、やすむべし)

常に玉を持ちっぱなしにせず、休みを入れることの重要性を表現した格言。

売り買いは臨機応変に、ときには素早く行わなければならないが、休みを入れないと利益を蓄積していくことはできないという意味である。「休むも相場」と頭でわかっている、なかなか実行することは難しい。『相場難儀道』『相場戒律』などの著書で知られる投資日報社会長の鏑木繁氏によると、「売るべし、買うべし、休むべし」という相場金言をつくった人物が、実はぜんぜん「休む」ことをしなかった。そして「できないから金言にしたんだ」と言ったそうである。笑話でありながら、人間の心理を実にうまく表現しているものである。

▶休むも相場

売れば二上がり、買や三下がり、切っ飛ばせば本調子

(うればにあがり、かやさんさがり、きっ飛ばせばほんちようし)

「二上がり」「三下がり」「本調子」は、いずれも三味線の調子(チューニング)の種類で、それに引っかけた相場を皮肉ったもの。つまり、「売ると上がってしまい、買えば下がる」のが常で、「切っ飛ばすと冷静になって相場がよく見通せる」ということ。

玉を持っている、あるいは持とうとしただけで冷静さを失ってしまうのが人間である。それを十分に心得て、自分の心理・感情をうまくコントロールしていく必要がある。

噂

(うわざ)

材料、大手の動向などについて市場に流れる予測。

市場の先行きを正確に知ることなどできないのだが、できれば知りたいと思う気持ちから、さまざまな噂が飛び交う。怪しげな噂が真実である場合もあるが、お金の取り合いをする競争の場で流

れる情報は、1) 発信者にとって有利(受信者に不利)であるもの、2) 発信者が自身の不安を軽減するために流しているもの、などさまざまで、区別することすらできない。

一般的に噂などというものは、あてになるものではない。まして、市場におけるそれは極めて極端である。たとえば、「この銘柄を〇〇ファンドが買うらしい」というのは噂としては形になっているが、「来月1,000円まで上がるらしい」などというものになると、冷静な第三者なら知能を疑いたくなるが、そういう話が半ば本気で受け取られて次々と流れていくのが市場という場所であり、参加者がいかに感情的になるものかを理解することができる。

上長

(うわなが)

売り長に同じ。常に、買いに対して売りを上側、あるいは左側に書くのが慣習である。

◀売り長

上抜き

(うわぬぎ)

▶抜く

上抜く

(うわぬく)

▶抜く

上値

(うわね)

- ①現在の価格あるいは直近の高値より上の価格。
- ②単純に「いまより上の価格(帯)」。
- ③保合の上辺(抵抗線)
- ④「近い将来いまより上に動いたら、投資家がどう出るか」とい

▶上値抵抗線

う、仮定+投資家の動向。

【例】上値に抵抗がある＝重い（頭重い）

図下値

上値抵抗線

（うわねていこうせん）

チャート上で、上値の抵抗となる価格帯。通常「抵抗線」という。

➡抵抗線

上放れ

（うわばなれ）

上に放れること。

➡放れ

運用

（うんよう）

広辞苑には「うまく機能を働かせ用いること。活用。」とある。金融の世界で運用といえば「資産（資金）の運用」であり、「お金をいかに効率よく増やしていくかの競争」となるが、このような簡単な説明を受け止めたときの一般的な理解は、非常に偏ってしまったり、あるいは極端に誤解を含んだものになりやすい。たしかに競争なのだが、相対的な順位が問題となるものではない。具体的な例を出せば、1990年以降日本の株式市場が大きく下げた局面において、どのような姿勢で運用に臨んだかがわかりやすいものとなるだろう。もしも株式を大量に抱えていた場合、株価指数の下げ率より持ち株の下げ率が低かった（市場平均であるベンチマークを上回った）としても、大きな損であることに違いはない。まして、1989年までの上げ相場で資金を増やした結果高値圏で持ち株を増やしていたり、借入れをしてまで株を増やしていた場合は、資産の額が上げ相場以前の水準を下回るのに、それほど時間はかからなかったはずである。

運用◀

仮に、下げの期間、株のカラ売りなどをせずに現金をそのまま持っていただけでも、デフレによってモノの値段が下がったのだから、手持ちの現金は価値が増えたことになる。また、下げ相場のはじめは金利が高かったので、安全な定期預金にしていれば何もせずに倍以上の金額になっている（さらに、モノの価格が大きく下がっている）。

株をはじめとした資産運用の対象物に価格の上げ下げがあるだけでなく、お金そのものにも価値の上げ下げが存在するのだから、単純に「上がった、下がった」だけの問題ではない。それに加えて、個人個人お金に対する価値観は異なるのだから、目まぐるしい順位競争から少し距離をおいておかないと、根本から間違いを犯してしまうことになるのである。

え

益回り

(えきまわり)

➡株式益利回り

エクイティ・ファイナンス

(えくいてい・ふあいなんす)

Equity finance。企業の資金調達のうち、株式の時価発行増資など株主資本の増加を伴う資金調達と、転換社債発行など株主資本増加を伴う可能性のあるもの。

株券を発行する側である企業にとって返済義務のない資金調達（前者の場合）であるが、1) 支配関係が変化する、2) 発行株数が増加することで1株あたりの利益が薄まる、3) 1株あたりの配当額を下げない限り配当金総額は増加する、というマイナス面がある。

図 デット・ファイナンス

SQ／スペシャル・クォーターション

(えすきゅー／すべしやる・くおーてーしょん)

特別清算指数。

先物およびオプションは、日経平均、TOPIXなどの株価指数を原資産としているため、取引終了（納会）後に残った玉について現物の受け渡しを行うことができない。そのため、納会の翌日に指数採用銘柄それぞれの始値からSQ（特別清算指数）が算出され、それによって差金決済（損益だけの現金決済）が行われる。

先物は3、6、9、12月、オプションは毎月、それぞれ第2金曜日がSQ、その前日がSQの対象となる限月の売買最終日となる。SQ当日、原資産となる株価指数に採用されている銘柄それぞれの始値からSQの値が算出される。銘柄数が多いとはいえ、一時

点の株価からSQ値を出すため、恣意的な売買によって相場の波乱要因となることを懸念する声が常に聞かれるが、現物の需給が根底にある以上、波乱があっても一過性か、トレンドが必然的に変化するわずかなきっかけになるだけと考えるべきである。

FAI

(えふえーあい)

林投資研究所が主催する投資クラブ。FAIはFree and Acquired Investors（自由にして努力した投資家）の略。

大きく下げ低位に放置されている銘柄から、大きく上伸するものをテクニカル、ファンダメンタル両面から積極的に選定し、分散投資する手法で売買を行うFAI投資法のみを行っている。

一般的に投資クラブとは「共同で資金運用をする組合組織」とされているが、FAIクラブでは対象とする投資法（低位株投資）を研究し、技術の向上と売買銘柄選定に活動を限定している。特殊な場合を除いて、売買は個人の感性・感覚で行うものであり、共同運用では本質とかけ離れたものになってしまうという考え方である。

お

追い証

(おいしょう)

①証拠金を追加で要求されること。

②そのとき要求される証拠金。「追加証拠金」の略。

既存の建玉の評価損は一定の計算方法によってマイナス評価され、その分証拠金が実際の差し入れ額より少なく見積もって計算される。価格変動で評価損が一定の額になれば、現在ある建玉を継続するために証拠金を追加で差し入れることが必要となる。

追い証が発生するということは、資金に対して建玉が多すぎるということである。また、それほど過大な取引額でないのに追い証のレベルに達したのならば、見込み違いに対応した損切りができず、ズルズルと長持ちしてしまったことになる。

応募者利回り

(おうぼしゃりまわり)

新発債を購入して償還まで保有したときの利回り。

年間の収益を投資元本で割って計算される。年間の収益とは、1) クーポン、2) 償還差益を償還までの年数で割ったもの、の合計。投資元本は発行価額×数量。

往来

(おうらい)

一定の価格帯を行ったり来たりすること。

短い期間を指した場合、保合と同義だが、「保合」「ボックス相場」などの語に比べて長い期間を指し示す場合が多い。

【例】1992年から1996年にかけて、下げ途中で中段の往来をみせている銘柄が多数あるが、政府による株価維持政策によるものと指摘する向きが多い。

大口

(おおぐち)

①金額の大きい商い。

②価格に与える影響が大きい、あるいは今後の価格動向を予測する上で、気になる規模の注文。

③(目先の手数料が欲しい証券会社にとって)たいへんありがたい注文。

◻小口

大相場

(おおそうば)

大きな値上がり。大きな相場。

「相場」という言葉が持つ意味のうち、「人気を集めた一定以上の上げ」に「大」をつけたもの。

「短期的に噴く」というより、時間をかけて大きく上がり息の長い相場」というイメージが強い。

大底

(おおぞこ)

長い期間(日柄)で見た場合の底。

株の上げ下げのサイクルは非常に長く、5年~10年の上げ下げが存在する。その流れの中での底が、ほんとうの意味での大底である。

ときどき、「目先の底」という意味なのに、買い偏重の一般投資家を煽るように大底という表現が使われることがある。これを見て「逃したら損」とばかりにあわてて飛びつき買いをすると、ダボハゼ投資家になってしまう。

理論的な定義が重要である、ということではないが、売買法に沿った日柄観測を考えることが大切、と認識しなければならない。

大台

(おおだい)

⇒台替わり

大台替わり

(おおだいがわり)

⇒台替わり

大台乗せ

(おおだいのせ)

⇒台替わり

大台割れ

(おおだいわれ)

⇒台替わり

大天井

(おおてんじょう)

長期の日柄で見たときの天井。

大きな流れでも目先であっても、天井は天井である。が、あえて大天井と言った場合、

1) ここで売り損なったら、長い期間戻ることがない、2) ここからカラ売りをはじめれば、下げトレンドが長く続くので非常に有利、という意味を含む。

大化け

(おおばけ)

大きく化けること。化けること自体が「大きい」という意味を含んでいるのだが、さらに強調した言葉として、ひとつの用語といえる。暴騰—大暴騰、というのと同じ。

株価の動きは派手で、参加者も派手好きで、自然と参加者に情報

を与える側は派手さを競うことになり、用語も派手になる。それらの派手な情報に翻弄されないようにするのが勝つための条件である。

大引／大引け

(おおびけ)

⇒引け

大引足

(おおびけあし)

終値だけを点で表し、点と点を線で結んでいくシンプルなチャート。「とめ足」「ほし足」「折れ線グラフ」ともいう。

大引値だけを採用するので、月足など基本単位とする期間が長い場合は不向きだが、日足においては、シンプルで自分の感覚を素直に売買に直結していくことがやりやすいため、プロに好まれている*。

一般に「なにか特別の売買サインはないだろうか」と断片的なシグナルを探すことが試みられ、複雑なチャートが好まれる傾向があるが、そんなものがあつたら市場そのものが成立しないのである。上手な人ほどシンプルで、バカみたいに単純な基準で売買をしているものである。

※酒田線法など、ローソク足によって具体的な売買を決定していく売買法もある。

大引値

(おおびけね)

引け値と同義。

お化粧

(おけしょう)

⇒ドレッシング買い

押し

(おし)

➡押し目

押し目

(おしめ)

上げ相場の途中で一時的に下がったところ。「押し」ともいう。相場の方向が転換して下げに転じたのなら押し目ではなく、下げははじめである。それまで上げ相場が続いている事実と、将来も上げ相場が続くという予測が前提となる表現である。

➡押し目買い 戻戻り(もどり)

押し目買い

(おしめがい)

- ①相場の押し目を狙って買うこと。
- ②上げ相場が続くから押し目で買うのが正解である、という予想。

押し目待ちに押し目なし

(おしめまちにおしめなし)

押し目を待っているときほど押さないものだ、という意味のことわざ。

株価を的確に予測したりコントロールすることはできないので、自分に都合のいいように考えがちである。「底を打って上昇しはじめた」という確信によって押し目買い狙いを決めるのだが、その時点での心理は「買いたい弱気」であり、価格を気にしていると機を逃すこともある。

➡戻り待ちに戻りなし

オシレーター

(おしれーたー)

RSI(相対力指数)、サイコロジカルラインなど、相場の上げ下

げを当てるために考案された指標。

いかなる理論を使っても相場の先行きを当てることは不可能であり、もし可能なら不特定多数の投資家が自由に売買する場所である市場そのものが成立しない。したがって、現実の行動(売買)の対象となる株価と乖離した指標を用いて判断することは複雑すぎ、結果をもたらす最も大きな要素である投資家自身の精神状態を無視して予測に偏りすぎることから、プロの間では否定されている。もちろん、売買の現実をきちんと考慮した上での限定的使用なら有効な場合がある。

落ち

(おち)

①返済と同じ意味。「埋め」ともいう。

「成行で10,000株買い落ち」と言ったら、「信用取引でカラ売りしている玉を10,000株買って返済する」という意味。

◻建ち

②先物・オプションの当限(とうぎり)が売買最終日を迎えて納会となること。

(商品相場では「当限落ち」などと使われるが、株式市場ではあまり使われないようである)

③割当日を過ぎて、配当や株式分割の権利がなくなること。

➡配当落ち、権利落ち

追っかけ

(おっかけ)

値段が動いてから、あわててそのトレンドに乗るために玉を建てること。

トレンドに乗る、つまり「上げ相場で買う」「下げ相場では売る(カラ売り)」のが利益を出すための大切なイメージであり、この基本はたとえ順張り戦略でも逆張りでも同じである(タイミングが違うだけ)。

「追っかけ」というと、「順張りに乗る」というよりも、「自らの基本とするタイミングより遅れてしまったが、とりあえず乗ることを優先して玉を入れてしまう」という否定的な感じになる。

踊り場

(おどりば)

本来の意味は「階段の中途を広くして、足休めとした所」(広辞苑)だが、値動きにあてはめて中段の保合という意味で使う。

単に「横ばいをみせている」というより、「トレンドは変わらないが一服している」というニュアンス。

オプション取引

(おぶしょんとりひき)

デリバティブ(金融派生商品)の一種。市場の特定の銘柄について、期限と価格を決め、その価格(権利行使価格)を超えた場合、超えた分だけ買い手が利益を受け取り、売り手が負担する(コール)、あるいは、その価格を下回った場合に下回った分だけ買い手が利益を受け取り、売り手が負担する(プット)ことになる。

「コールオプション=買う権利」「プットオプション=売る権利」と説明されることが多いが、どうもピンと来る言葉とは思えない。先物から「価格変動の可能性」だけを抽出したものであり、似ているようだが、一般的な「手付け」とはかなり違うものと認識したほうが誤解がないだろう。

オプションは、保険や博打と本質的に同じだが、決められた条件を満たす事象が起こるか起こらないか、という線引きではなく、決められた価格(権利行使価格)をいくら超えたか(コールの場合)、あるいは、いくら下回ったか(プットの場合)によって授受される金額が違ってくる上に、対象となる事象そのものが取引所で規格化された価格変動商品であり、投資家は保険契約者(買い手)にも保険会社の立場(売り手)にも自由になることができる点で、大きく違っている。

コールでもプットでも、買い手は一定のオプション料(プレミアム、市場で決まる)を支払って無限の利益の可能性を持ち、売り手はオプション料を受け取ることで無限の損失の可能性を持つことになる。このため、「買い手=損失限定、利益無限」「売り手=損失無限、利益限定」という説明がなされることがあるが、こういう理解は危険である。たしかに金額的にはその通りだが、オプション料は実体よりも割高であり、権利行使価格に到達し、さらにオプション料の分上回る(下回る)ことで利益トントンになるのだから、「買い手=損失額は限定だが、極めて高い確率で損をする」「売り手=利益額は限定だが、極めて高い確率で利益となる」という説明が正しいと思う。

このような特殊な性格の取引であるため、「コールの買い手とプットの売り手=強気」「コールの売り手とプットの買い手=弱気」という単純な考え方は成り立たない。あくまでも、「売り手になるか買い手になるか」という立場の違いと売買法のよってさまざまなことが決まってくることになる。

オプションは少額で取引が可能なので、リスクを承知で買い手に回る投機家、手持ちの玉のヘッジ(ツナギ)として適当なオプションを買う投資家、大きく変動したときのリスクを抱えながら割高なオプション料を取っていく売り手などが複雑にからみ合い、また、違う権利行使価格、プット・コールの別などをうまく組み合わせる合成の手法も用いられ、背景は非常に複雑なものとなる。しかし、基本的な存在意義としては、先物と同じく「ヘッジの機会を提供し、市場規模の拡大と公正で円滑な価格形成を促進する」ものである。

身近な金融商品でオプションが利用されているものは、転換社債(CB)とワラントである。転換社債は普通社債(SB)に「株を取得するコールオプションがついており、株の取得時には転換社債の額面を払い込みに充当できる」というものである。コールオプションのプレミアムとして、社債の金利が安く設定されている。ワラントはコールオプションそのものといっていい。しかし、

▶オプション取引証拠金

どちらも、投資家はオプションの買い方にしかなることができず、売り方は常に発行企業となる。

オプション取引証拠金

(おぶしょんとりひきしょうごきん)

➡証拠金

重い

(おもい)

①上昇しそうだが、なかなか上がらない様子。頭^{ずおも}重い。

②平均して値動きが鈍いこと。

下げ相場ではなく上げトレンドのとき期待ほどのスピードで上がらずにもたつけば、買い方はいらつき不安を感じる。しかし、売り方が確信を持つほど弱いわけではない、という状態。

気迷いと似ているが、気迷い＝保合、重い＝一応上げトレンドというニュアンスである。

【例】値が重い。上値が重い。

☞軽い

思惑

(おもわく)

①市場動向の予想。

②(建玉の背景としての) 予想。動向についての希望。

③投機的な売買。

上がる思惑で買うことを「思惑買い」、下がることを予想してカラ売りすることを「売り思惑」という。

③の意味では、ある会社の株主になるなどの実需と区別して、価格の上げ下げを狙った売買をしばしば否定的に表現されることがある。だが、前者を投資、後者を投機として議論してもその境界は定かではなく、そもそも自らの利益を求めて行動するゲーム(ルールのある競争)によって公正な価格を決定しようというの

織り込み済み◀

が市場の原則である。

したがって、ときには法律スレスレの無茶な売買をするような投機筋を「思惑筋」ということがあるが、単なる市況解説用語であって、存在そのものを云々するべきではないことになる。

親会社

(おやがいしゃ)

議決権、その他の状況から、別の会社を実質的に経営支配している法人(株主)。

☞子会社

親株

(おやかぶ)

旧株のこと。「新株」の項を参照。

➡新株

親引け

(おやびけ)

新株発行などのファイナンス時に、関係者が証券を引き受けること。発行企業や周辺関係者の都合を反映したもの。

織り込み済み

(おりこみずみ)

材料の効力がすでに終わっていること。材料出尽くし。

材料が出たら瞬時に織り込み済みとなる、というのがテクニカル分析の基本であるが、その材料によって新たなトレンドが形成されれば、「トレンドは一定期間継続する」ことになる。しかし、新たな材料が出ないとそのトレンドが継続しない(であろう)状態になれば、その材料は「織り込み済み」ということになる。

しかし、材料の効果も、市場の動向も、計算によって答えを出せないのだから、予測に基づく判定となる。

▶織り込む

市場の人気は常に事実に対して先行して動く（株価の「先見性」）。たとえば、バブルの天井は1989年12月末（日経平均）だが、野村証券株の天井は約2年半早い1987年4月20日であった。

織り込む／織り込まれる

（おりこむ／おりこまれる）

新しい材料に株価が反応し、その材料を含んだ株価になること。

➡織り込み済み

オルタナティブ投資

（おるたなていぶとうし）

➡代替投資

折れ線グラフ

（おれせんぐらふ）

➡大引足

折れ線チャート

（おれせんちゃーと）

➡大引足

終値

（おわりね）

日、週、月など任意の期間の最後についた価格。

➡4本値